

『留学の愉しみ―異国の歴史や文化との触れあいを求めて―』

(東海大学出版、一九九七年)

佐藤 達雄

日本の留学の歴史は古く、遣唐使の時代から今日にいたるまで、連綿とした歴史を辿っている。

留学の伝統、もしくは留学文化があるといっても過言ではなからう。明治維新以降、日本は欧米諸国の制度を移植するために数多くの留学生を送り出した。それは国策としての留学であった。例えば、タイプは違うにせよ、森鷗外や夏目漱石にはそれぞれの留学に対する重みがあったであろう。

しかし、今日における留学の質は以前の留学とは違う。日本の経済力が強くなる中での「国際化」という要請があるものの、基本的には語学習得や文化理解、自己成長が目的であろうが、時には「遊学」のため、と個人的要請が強くなっている。

本書『留学の愉しみ』は、このタイトルからも分かるように、多くの学生諸君を留学に誘おうとするものである。東海大学は世界中の大学と提携を結び、毎年派遣留学生を送り出してきた。毎年一二

カ国、二一校に長期・短期の派遣留学生を送り出している。本書ではこれらの学校のうち、スペインのサマランカ大学、フランスのモンペリエ大学、ドイツのフンボルト大学、ロシアのモスクワ大学、アメリカのサンフランシスコ州立大学、ハワイ東海インターナショナルカレッジ、ウェイク・フォレスト大学、韓国の漢陽大学、中国の人民大学の紹介が書かれている。

まず一読して思うのは、沢山の大学の紹介を通じて、本当にその地に留学したような気分になることである。スペイン、サマランカのマヨール広場のカフェテリアでコーヒーを飲みながら、一七〇〇年代の美しい建築、彫刻、装飾などを楽しむ事ができよう。また、北京ではもうもうとする埃の中で人の海に揉まれながらも、街中いたるところに、故宮、頤和園を発見し、悠久の歴史の中に身をおくことができよう。

また、その大学の歴史が、その地域の歴史や文化を背景に成り立

っている事を感じさせられる。例えば、ロシアのモスクワ大学の創立は、ピョートル大帝の遺産を抜きにして語る事はできないし、アメリカのウエイクフォレスト大学の創立も、当時の南部における煙草産業や工業の發達を抜きにしては考えられない。余談になるがこれらの歴史は意外と、日本にも関わってくる。ピョートル大帝の改革は明治維新の御手本として当時の日本の知識人に受け入れられている。またアメリカ南部の煙草産業の發展に関連して言えば、ウエイクフォレスト大学のあるノース・カロライナ州、ウィンストン・セーラム市は日本のコマージュでもよく見られる煙草の銘柄「ウィンストン」「セーラム」等の發祥地だそうである。

もちろん留学であるから、実際の授業や現地での活動にも言及している。たとえば、アメリカのウエイクホレスト大学の授業では学内のホモセクシャル団体の代表者が招かれ、彼らとデイスカッションするエピソードや、韓国ソウルで飲食店に足を伸ばしビビンバなど現地の料理を食べることなど、留学生活ならではの、異文化交流をとおしての愉快なエピソードに触れている。

またそれぞれの大学の留学経験者が当地での体験談を書いている。ドイツのフンボルト大学に留学した学生が「異文化に触れる事は自国の文化をも考えるきっかけになります」と言い、ドイツで感激した事として美術館や音楽、オペラをなどの文化を身近にそして安くで（あのベルリンフィルハーモニーでさえも）味わえる事をあげているが、このような発見に学生の文化体験の意義を見出すような気がする。

ただ、学生の体験談について言えば、紙幅が少なく、申し訳程度につけただけという感じもする。もう少し彼らの意見や感想を紹介

すれば、留学をする学生としての立場から、面白くて実際に役に立つものが得られたのではないだろうか。本書がそれぞれ面白い話題を提供しながらも、各大学の紹介とどまっている観があるのはこの辺に問題があるのではないだろうか。

留学というテーマに戻って考えてみると、時代の差異や目的の多様性こそあれ、留学が異文化との接触を通しての自己認識の場であることは否定できないだろう。韓国の漢陽大学の紹介の冒頭では次のように書かれている。

「君はこれまでの人生で、君の存在を否定されたことがあるか。……まだなかったら、韓国に行け。そこで君は徹底的に否定されるから。」留学が異文化と自己の溝の深さを知るところであり、それを乗り越えて成長していく場であることを思い知らされる。